

11—12 世紀におけるアレppoの自治都市への発展

余部 福三

The Growth of Civil Power in Early-Islamic Aleppo: 1014–1125

Fukuzo AMABE

After the disintegration of 'Abbāsīd centralism in the mid-later tenth century, many cities located between Iraq and Egypt enjoyed virtual autonomy under weak 'Abbāsīd or Fāṭimīd governors (*amīrs*). They were obliged to seek the approval and cooperation of citizens, especially land-owning, cultured patricians, called *a'yān*, *shuyūkh*, *mashā'ikh*, *wujūh* and *ashrāf*, in the decision and execution of important matters. This is what Hodgson once called *a'yān-amīr* system. This article is an attempt to detect and follow the course of the development of *a'yān-amīr* system leading to a relatively short-term patrician seizure of power after many twists and turns in the city of Aleppo.

The Aleppan patricians, including the 'Abbāsīds, 'Alīds, Jarādīs, Usāmīds, Kisrās, 'Aṭṭ-ārīds and Khashshābīds, first loomed large after the death of the Ḥamdānīd prince, Sayf al-Dawla, in 967; they supported one of his professional horsemen (*ghilmān*) named Qarghūya against his son, and then in 970 bore witness to the conclusion of the treaty accepting Byzantine protectorate. Then, Lu'lu', another Ḥamdānīd *ghulām*, returned the land confiscated by Sayf al-Dawla to patricians and abolished additional land tax rate introduced by the latter.

Lu'lu's son and successor, Maṣṣūr, had to withstand Kilābī incursions, simultaneously with facing the patrician growing power. He was the first ruler to gather footmen from plebeians (*'amma*) including not only Muslims, but also Christians and Jews. On the other hand, Muslim patricians, and probably also plebeians (almost equally divided between Sunnis and Shī'īs), tended to lend their support to the Ismā'īlī Fāṭimīd caliphs in opposition to Byzantine overlords.

A Kilābī leader, Ṣāliḥ b. Mirdās, seized Aleppo from the Fāṭimīds in 1024, heavily

depending upon the support of Christian citizens. The Mirdāsids not only appointed Christians as *wazīrs* and *kātib*s, but also organized a plebeian police force dissociated from patricians, called *aḥdāth*, appointing Sālim b. Mustafād, one of the Ḥamdānid *ghilmān*, as its commander and head (*raʿīs*) of the Aleppans. Thus, the *raʿīs* and *aḥdāth* of Aleppo were essentially an auxiliary force of *amīr*s, not necessarily representing civil power. On the other hand, Muslim patricians continued favoring the Fāṭimids over the Byzantines; the *aʿyān-amīr* system was considerably attenuated during the Mirdāsīd holding of power.

In 1080 a Sunni ʿAbbāsīd patrician, Khutayṭī, attempted to seize power at the expense of the Mirdāsīds, relying upon his own plebeian *aḥdāth*. This is the first Aleppan attempt of establishing a patrician city. The majority of Aleppans, however, accustomed with the traditional *aʿyān-amīr* system, decided to accept the Seljuqīd rule, eliminating Khutayṭī in 1086. Under Seljuqīd governors a large part of the *aḥdāth* was dissociated from patricians and put under the command of the *raʿīs* of robber origin, Mujann. Riḍwān, Seljuqīd monarch of Aleppo, was too heavily dependent upon the *aḥdāth*, resulting in Mujann's attempt to seize power. This is an attempt of establishing a plebeian city. Desperately, Riḍwān was forced to recruit Nizāris (Assassins) as unpaid mercenaries.

Riḍwān's inability to resist the advance of Antiochean and Edessan Crusaders to seize rich land surrounding Aleppo, coupled with his loss of confidence among Syrian Muslim rulers and Aleppan patricians, led to the formation of Sunni-Shīʿī coalition of citizens under the leadership of the Shīʿī eloquent qāḍī, Abu'l-Faḍl Ibn al-Khashshāb, at the expense of Christian citizens. Although one of Riḍwān's eunuchs, Lu'lu' attempted to preserve the old order, he proved powerless against both the rising civil power and the Turkish supporters of the all-powerful Seljuqīd governor of Mosul, Aq Sunqur al-Bursuqī, who was fully equipped with professional horsemen (*ghilmān*) and bureaucrats. The city of Aleppo outside the citadel (*qalʿa*), in which the Seljuqīd family, their eunuchs and *ghilmān*, entrenched themselves, was virtually put under patrician control.

After banishing Lu'lu', Ibn al-Khashshāb fully seized power, but his lack of horsemen to resist the Crusaders compelled him to appeal for help to Turkmen leaders, especially the Artuqīd ʿĪl Ghāzī, ruler of Mārdīn, and then his cousin Balak of Khartpert, under the guise of *jihād* against the Franks. The Artuqīd leaders were especially ideal as condottieres, because they lacked an infrastructure (i.e. bureaucracy and standing army) to put Aleppo under their strict control from their faraway strongholds. Even when ʿĪl Ghāzī stayed in Aleppo he was not admitted to the citadel. The failure of ʿĪl Ghāzī's son to rush for the succor of Aleppo during a Crusaders' devastating siege compelled the patricians to appeal for help to the

fearful Bursuqī of Mosul.

Bursuqī and his successor Zangī succeeded in putting an end to the patrician rule, murdering Ibn al-Khashshāb and taking his son away to Mosul, and incorporated Aleppo in their large centralized state. It is noteworthy that *ra'īs* and the *aḥdāth* did not play an important part in supporting Ibn al-Khashshāb's civil power. Maybe, Ibn al-Khashshāb took advantage of the congregation of Friday prayer in persuading the citizens and perceiving their perception. He was also likely to often consult patricians in mosques and his and their residences. However, a stably functioning, legitimized political institution apparently failed to make an appearance.

はじめに

アッシリアの帝国時代以来、官僚制・常備軍と駅通制等によって、きわめて多数の都市の集権的支配を目指す大規模国家（いわゆる帝国）の支配が1800年近く続いてきた中東・地中海地域では、10世紀後半以後、アッバース朝国家の崩壊にともない、アッシリア以前に一般的であった独立都市が復活するきざしが見られた。自立した都市にははじめ外人軍人出身の君主がいたが、しだいに市民勢力が伸張した。アッバース朝（あるいはそれを傀儡化したブワイフ朝大將軍）の本拠イラクと、ファーティマ朝の本拠エジプトとの狭間にあるシリアでは、11世紀初頭の後ウマイヤ朝崩壊後のアル・アンダルス（イベリア半島）、11世紀半ばのズィーリー朝崩壊後のチュニジアなどと同様、その傾向が顕著であった。本稿は、10世紀後半のダマスクス、11世紀のコルドバ、トレード、バレンシアの市民自治運動を追究してきた中で¹⁾、12世紀初頭のアレッポでも、十分ではないにしても、一時的に名望家寡頭政の門閥都市体制が成立したことを、比較的に通時的な検討を通じて見出そうとする試みである。通時的に検討したのは、時代や地域による大きな差異を無視する静態的、共時的な用語の分析では、本質を見誤る危険性が大きいからである。

アレッポ Aleppo（これはイタリア語、英語であり、アラビア語ハラブ Halab, 古代アモリ語 Halap, セレウコス朝・ローマ時代のギリシア語 Beroia）は、古代ヤムハド Yamkhad 王国（前1780—1595頃）以来、肥沃で広大な農業地域（小麦、オリーブ、ブドウ、イチジク、ピスタチオ、綿花等）を周囲に擁し、イラク、イラン、インド洋と小アジア、イタリア、地中海とを結ぶ交通の要衝であり、シリア内陸北部最大の都市として栄えてきた。また、アレッポは地中海性気候の農耕地域とステップ気候の遊牧地域との境界に位置するため、遊牧民から羊等の供給を得やすかった。反面、政治が混乱に陥ると、遊牧民の侵攻を受けやすかった。東ローマ（ビザンツ）帝国時代の5—6世紀には、アラブ遊牧民のタヌーフ Tanūkh 族が農耕地域周縁部に進出し、アレッポ市壁西南端の外側にハーディル *hādīr* という宿营地を設け

た。(B 1/562-3) 同様にアッバース朝が衰退した 10 世紀前半にも、キラーブ Kilāb 族などのアラブ遊牧民が大挙、進出してきた。

ローマ時代の都市形状はイスラーム初期にも残り、ほぼ正方形の市壁と多くの城門はそのまま利用され、中心部に位置するフォーラム *forum* (広場) は壁で囲われて、ダマスクスのウマイヤ家のモスクと同様なモザイクや大理石で飾られた大規模なモスクとなった²⁾。ただ、1 キロに及ぶ幅 20—5 メートルのローマ時代の東西列柱大通り *decumanus* は、ビザンツ末期からイスラーム初期には平行した幾筋もの細い通りに分けられて、市場 (スーク *sūq*) となった³⁾。このスークを東に突き抜けた東端にある、大平原の只中に切り立つように聳える丘は古代より城塞 (カルア *qal'a*) として利用され、10 世紀後半以後、城壁で囲まれ、内部に宮殿や官庁が設置された。13 世紀初頭には新しい市壁がカルアの東方に築かれ、市街が二倍に拡大したし、オスマン帝国期には市壁の外側にも市街が発達した。

ダマスクスでは 10 世紀末、ファーティマ朝の侵攻に抗して、都市名望家 (門閥) または民衆出身の筆頭市民 (ライース *ra'īs*) とアフダース *ahdāth* とよばれる組織化した武装民衆が自治都市の樹立を先導した。一方、同時期にビザンツやファーティマ朝の侵攻にさらされるようになったアレppoでも、名望家や民衆の活動がさかんになったが、ライースやアフダースが登場するのは 11 世紀のことである。さらに、シリア海岸部 (現レバノン) の海港都市、トリポリ (アラビア語 *Ṭarābulus*, ギリシア語 *Tripolis*) やティルス *Tyros* (アラビア語 *Ṣūr*)、またシリア内陸北部 (現トルコ領) のハッラーン *Harrān* などでも、11 世紀末に名望家出身の判事 (カーディー *qādi*) やライースの下で自治都市が形成された。

アルプス以北の北欧都市とは違い、イスラーム都市では、都市名望家とは広大な農地所有と学識 (預言者の伝承, 法学, 文法学, 歴史学, 天文学, 数学, 医学) をもち、ときに世界的遠隔地貿易や金融業に依拠した人々のことであり、都市住民の中核はスーク (市) に店を構える中規模の職人 (織物・食品・金属器・陶器・ガラス器・木工・紙・武器・石鹼など) や商人によって占められ、毛すき工, 皮ナメシ工, 屋台店の商人, 行商人, 家内労働者, 荷かつぎ, ごみ運び, 盗賊, いかさま師などは下層に近いと考えられた。商人・職人 (それに農民) の移動が自由であったにもかかわらず、大半の人々は幾世代も特定の都市に定着していた。社会的身分はなく、地位の上昇, 下降 (とくに女子を含むイスラームの財産分割制の結果) は頻繁であった。社会関係が柔軟な中世中東社会では、ある名望家の声望が高まると、その庇護を受けようとする市民が急増した。

マックス・ウェーバーは、11 世紀以後の北イタリア都市・北欧都市と古典ギリシア都市をモデルとして、インド都市, 中国都市と比較し、前者の「兄弟誓約による成立」「呪術的性格からの自由」, したがって合理主義や自由の精神の発達を強調した⁴⁾。そのため、かれの議論は古代オリエント・ローマ帝国以来の中東・地中海都市の全体像ではなく、北イタリア都市や北欧都市に引張られた傾向的な議論になっている。全体像を踏まえれば、かれが

いう門閥都市は、伝統的な商業資本家や土地所有戦士貴族（騎士）だけの門閥支配ではなく、新興の地主層・大商人層を含めての概念と捉え直すべきであろう。中東・地中海都市では両者の区別が困難だからである。かれがいう平民都市とは、下層民の支持を利用した平民の新興富裕層が政権を獲得した都市のことであるが、それだけでなく、10世紀末のダマスクスや14世紀末のフィレンツェのように、民衆出身者が民衆を率いて政権を握った民主政に近い都市も含めるべきであろう。また、北イタリア都市ではギルドが自治の基本的単位になり、市民が騎士文化を育成したが、古代都市を継承したイスラーム都市（それに南イタリア都市もか？）では、ギルドも市民騎士も育たなかったとされる。

アッバース朝国家崩壊後、イスラーム都市では外来の君主または総督 *amīr* による上からの一方的な命令権行使は困難になり、名望家の同意・協力を得ることが一般的になった。ホジスはこれをアァヤーン（名望家）・アミール体制 *a'yān-amīr system* とよび、ウェーバーがいう「伝統的支配」の中でも、実際はその場その場の自由で合理的な法的判断が優先されていたと論じた⁵⁾。ホジスは大雑把な見通しを示しただけであるが、一般的にいて、かれが指摘する傾向はあったと認めてよい。その場合、イスラームの自治都市とは、アァヤーン・アミール体制がさらに進行し、アミール権が名目的なものになるか、消滅した都市と位置づけることができよう。

アレppoやダマスクスの名望家支配にはじめて着目したアシュトルは、そこに、北欧都市とは異なるヘレニズム・ローマ都市との継続性を見た（市場監督官 *agoranomos* が *muhtasib* に、騎兵隊長＝警察長官 *hipparchos* がライスに）。ついで、カエンが、14世紀までのシリアから中央アジアに至るイスラーム都市の民衆運動を包括的に論じる中で、この時期のアレppoをも取り上げた。カエンの議論は、シリアのアフダースとイランのフィットヤーン *fiṭyān* の比較対照としてはきわめて価値が高いが、ライスやアフダースが市民自治運動の中心であることを強調しすぎているし、同じ用語で表現されていても、地域や時代によって性格が異なることに注意していない⁶⁾。これに対し、ハフェマンは、ダマスクスとアレppoの君主に抵抗する市民運動と、君主に協力する「官僚的」な市民機関との違いに注目することによって、より厚みのある社会と政治構造の分析を行った⁷⁾。いずれも、本稿で扱うアレppo自治については概略的に取扱っているにすぎない。

最後に、本稿が使用する史料は有名ではないので、簡単に紹介したい。10世紀末から11世紀末の北シリアについては、バグダード中心の「世界史」のほかに、ビザンツの侵攻、トルコ系遊牧民トルクメン *Türkmen* の移住とセルジューク帝国の進出、十字軍の侵攻など同時代の大事件を叙述した多くの地方史が書かれた⁸⁾。しかし、ジャズィーラ東部ニシビス *Nisibis*（アラビア語 *Naṣībīn*）出身の地理学者イブン・ハウカルの地誌と、405/1014年にファーティマ朝の首都カイロからビザンツ支配下のアンティオキア *Antiochia*（アラビア語 *Antākiya*）に移った東方正教会（メルク派）の医師ヤフヤー・イブン・サイードの歴史、そ

11—12 世紀におけるアレppoの自治都市への発展

れにアレppoの名望家アズイーミーのシリア略史を除いて、すべて散逸した。

ただ、これらの散逸した記述は、12世紀のダマスクスの名望家イブヌル・カラニスィーのダマスクス史、12—3世紀のモースル *Mawṣil* (イラク北部) の歴史家イブヌル・アシールの世界史『完史』とバグダードからダマスクスに移ったスイフト・イブヌル・ジャウズィーの世界史『時代の鏡』、13世紀のアレppoの名望家イブヌル・アディームによる長大なアレppo人名事典『アレppo史探求への渴望 (下記の略号 *B*)』(三分の一程度現存) と通史『アレppo史精髓 (略号 *Z*)』, の中に、多くが取り込まれている。とくに『渴望』が史料注記の上で引用している同時代かそれに近い文献は膨大であり⁹⁾, 同じ内容をもつ (しかし注記はない) 『精髓』とともに、同時代史料に次ぐ価値をもつ。一方、13世紀のアレppoのシリア派名望家イブン・アビー・タイイ *Ibn Abī Tayyī'* のアレppo史は散逸したが、13世紀のアレppo市民イブン・シャッタードのシリア地誌、ダマスクス市民アブー・シャーマのザンギー朝・アイユーブ朝史や、14世紀のエジプトのイブヌル・フラート *Ibn al-Furāt* による長大な『諸王朝と諸王の歴史』 *Ta'riḫ al-Duwal wa'l-Mulūk* (大半が未刊) の中に多くが引用されている。

史料は本文中の括弧内に略号で示す。略号は以下の通りである。

Z: *Ibn al-'Adīm, Zubdat al-Ḥalab min Ta'riḫ Ḥalab*, ed. Khalīl al-Manṣūr, Beirut, 1996.

B: *Ibn al-'Adīm, Bughyat al-Ṭalab fī Ta'riḫ Ḥalab*, ed. Suhayl Zakkār, 11 vols., Damascus, 1988.

ページは通し番号

Hawqal: *Ibn Hawqal, Ṣūrat al-Ard*, ed. J.H. Kramers, 2 vols., Leiden, 1938–9.

Yahyā: *Yahyā b. Sa'īd, Histoire de Yahya-Ibn-Sa'id d'Antioche*, ed. I. Kratchkovsky et A. Vasiliev, *Patrologia Orientalis*, 2 fascicules, Paris, 1932, 1957. ページは通し番号

Az: *al-'Azīmī, La Chronique Abrégée d'Al-'Azīmī*, ed. Cl. Cahen, *Journal Asiatique* (1938), pp.353–448.

Q: *Ibn al-Qalānīsī, Dhayl Ta'riḫ Dimashq*, ed. H. F. Amedroz, Leiden, 1908.

K: *Ibn al-Athīr, al-Kāmil fī'l-Ta'riḫ*, ed. C. Tornberg, 13 vols., Beirut, 1965–7.

Mir'āt: *Sibt Ibn al-Jawzī, Mir'āt al-Zamān*, ed. J. Rassi, Damascus, 2005.

A: *Ibn Shaddād, al-'Alāq al-Khaṭīra fī Dhikr Umarā' al-Sha'm wa'l-Jazīra*, vol.1, ed. D. Sourdel, Damascus, 1953.

Shāma: *Abū Shāma, Kitāb al-Rawḍatayn fī Akhbār al-Dawlatayn*, 5 vols., ed. Ibrāhīm Shams al-Dīn, Beirut, 2002.

M: *al-Musabbihī, Akhbār Miṣr*, ed. W. G. Millward, Cairo, 1980.

第1章 アアヤーン・アミール体制とアレppo市民運動の発端

(一) アアヤーン・アミール体制の成立

アッバース朝の勢力が衰えはじめた10世紀前半以後、シリアからジャズイーラ（現シリア共和国北東部、一部トルコ領）、イラクにかけての広い地域で、アラブ遊牧民が農耕地域に侵攻し、牧草地への転換、農民からの保護料徴収をはじめた。かれらは、シリア北部ではキラブ族、ジャズイーラ西部のハッラーン・エデッサ Edessa（アラビア語 al-Ruhā, トルコ語 Urfa）地方ではヌマイル Numayr 族、イラク北部モースル地方ではウカイル ‘Uqayl 族という形で結集した。（Hawqal 228）この中で、自らもアラブ遊牧民タグリブ Taghlib 族出身のアッバース朝の軍人、ハムダーン Hamdān 家のサイフッダウラ Sayf al-Dawla は、イスラーム暦 333/キリスト暦 944 年、キラブ族の協力を得てアレppo進出を果し、シリア北部とジャズイーラ一帯の総督として、スグール Thughūr とよばれるビザンツ帝国との辺境の防衛をほとんど単身で担うようになった。

サイフッダウラは、後期アッバース朝と同じギルマーン *ghilmān* とよばれる主に中央アジア出身の騎兵を主力とし、(Z 67) アッバース朝の西方税務庁 *dīwān al-maghrib* の税務官僚であったイラン系のマグリビー Abu’l-Hasan al-Maghribī を宰相 *wazīr* として徴税にあたらせた¹⁰⁾。このように、かれはアッバース朝の常備軍と官僚の一部を継承し、広域支配体制を維持した。かれはまたアレppo市壁西外側のクワイク川流域に宮殿を構え、(Z 81; B 1/349; A 29) 地主私有地 *milk* の没収、徴税強化によって得た財源で、(Hawqal 177, 180, 225-6; Z 105, 121; B 1/59) アラブ遊牧民や辺境諸城塞の駐留兵をも結集しながら、ビザンツに対する攻撃と防衛に一定の成功を収めてきた。しかし、347/958 年以後、敗北が相次ぎ、辺境の諸城塞があいついでビザンツ軍の手に落ちていった¹¹⁾。

ついに 351/962 年には、ビザンツ辺境軍は司令官ニケフォロス・フォーカスの指揮下でアレppoに進み、不意をつかれたサイフッダウラの少数の兵とアレppoの民衆 *‘amma, ghawghā’* を破った。このとき、逃走したサイフッダウラにかわってニケフォロスと交渉をもったのは、シャイフ *shaykh* (pl. *shuyūkh*) とよばれる名望家であったが、結局、ニケフォロスは市民が守る市壁を力攻めで陥落させ、略奪・破壊・虐殺を一週間にわたって続けたとされる。(Z 78-82; Yahyā 86-9; K 8/540-2; A 16, 23-4, 29; B 1/349, 416) これ自体は市民による自衛にすぎず、自治都市運動ではないが、君主が欠けた場合、名望家の寡頭政になりやすいことを如実に示している。

ビザンツ軍が去ったあと、サイフッダウラはジャズイーラ北東端の都市マイヤーファーリキーン Mayyāfāriqīn（ギリシア語 Martyropolis, トルコ語 Silvan）に拠点を移し、再建されたアレppoには、ギルマーン騎兵の一人カルグーヤ Qarghūya を代官として置いた。(Z 85-6)

11—12 世紀におけるアレppoの自治都市への発展

市民は 354/965 年には、ビザンツ軍の手に陥落したスグール諸城塞の駐留兵によるアレppo 攻撃に対して、カルグーヤを支持し、(B 8/3656-8, 10/4592-3; Z 86-8; Yahyā 99-100) 2 年後にサイフッダウラが死ぬと、その子アブル・マアーリー Abu'l-Ma'ālī (Sa'd al-Dawla) の帰還を許さず、カルアの城壁と市壁を建設したカルグーヤの支配を受け入れたもようである。(Z 93-4; Yahyā 117-9; K 8/597-8)

さらに、アンティオキアを占領したビザンツ軍が 359/970 年、再度アレppo を攻めると、カルグーヤは市民の承認を得て、ビザンツ皇帝の宗主権を認める条約を締結した。その骨子は、市民全員の人頭税 *jizya* (1 人金貨 1 枚) の毎年の支払いと、ビザンツ領から入った隊商の安全保障、皇帝徴税吏による商品入市税 (10%) 徴収権、ビザンツに対するムスリム遠征軍の通行妨害、シリア遠征中のビザンツ軍に対する糧食の供給 (販売)、さらに皇帝によるカルグーヤの後継者選任権などであった。このとき、アブー・ウサーマ Abū Usāma 家、キスラー Kisrā 家、アブー・イーサー Abū 'Īsā 家、ハッシュャーブ al-Khashshāb 家、アブー・タリーブ Abū Ṭalīb 家、アッターール 'Aṭṭār 家、ハーシム Hāshim 家 (アッパース朝創設期にシリア北部に定着したアッパース家、K 10/115; A 16, 23, 31)¹²⁾ など、アレppo の多くのムスリム名望家 *shuyūkh*, *mashā'ikh* が宣誓証人となり、うち数人は人質としてビザンツ軍に引き渡された。この条約は、アレppo 側はイスラーム法で適法な永続的休戦 *hudna muabbada* とよんでいるが、実際は保護条約であり、アレppo はビザンツ国家体制の中に組み込まれた。現に、キリスト教徒ヤフヤーはこれを恒久的和約 *sulh* とよんでいる。(Hawqal 177-8. Z 95-8; Yahyā 125-6; K 8/604)

以上のように、カルグーヤの時代に、アレppo は広域国家の一部ではなく、付属農業地域を含む自立した都市と化し、事実上、都市君主 (または総督) が名望家の承認・賛同を求めるアァヤーン・アミール体制に移行したとみてもよいのではないか。また、キリスト教徒の名望家は政治的には影響力を排除されていたようである。

したがって、市民は防衛能力も十分ではない君主に必ずしも忠誠ではなくなった。カルグーヤが 364/975 年に部下のギルマーン騎兵に捕えられた 2 年後、市民 *ahl* はキラーブ族の協力を得てアレppo を包囲したアブル・マアーリーに対し、市を開城した。(Z 98-9; K 8/683; Q 24) さらに 382/992 年、ファーティマ朝のダマスクス総督マンガテギン Manjūtakīn がアレppo を包囲すると、市民は市を引渡そうとしている。アブル・マアーリーの子アブル・ファダーイル Abu'l-Faḍā'il は、このときビザンツのアンティオキア総督、3 年後には皇帝バシレイオス 2 世自身が率いる援軍を得て、ファーティマ朝の攻撃をかわすことができた。(Z 105-8; Yahyā 229-34; Q 40-3; K 9/89-90)

アブル・ファダーイルの死後 (392/1002)、政権を握ったギルマーン騎兵の一人¹³⁾、ルールー Lu'lu' は、名望家の支持を得るため、かつてサイフッダウラが没収した私有地 *milk* を返還し、農地税 *kharāj* をもとの税率にまで減税し、さらに貢納支払いのための追加税を廃

止した。(Z 105) かれの宮殿 *qaṣr* も、市壁北西のジュナーン Bāb al-Junān 門を入った市民居住区に建設され、付近に新しいモスクが創建された。(Z 112; A 28-9) このように市民勢力が増大し、門閥都市化の可能性も生まれた。

(二) 市民の分裂とミルダース朝の樹立

君主権を守ろうとしたルーラーの子マンスール *Manṣūr* に対し、ムスリム名望家は反抗をはじめた。また、近郊のキラーブ族指導者の中でも、ミルダースの子サーリフ *Ṣāliḥ b. Mirdās* はユーフラテス川中流域の渡河点ラフバ *Raḥba* の砦を奪い、アレppo獲得に目標を定めた。(Mir'āt 46, 70; K 9/210-1) 市民とマンスール、キラーブ族の三つ巴の闘争で市民が破れたのは、かれら自身の分裂のためのものである。本節ではこれを検討しよう。

まず400/1009年、市民はキラーブ族と結んで、ハムダーン朝の復活を策した。このときは、マンスールがアレppoの農耕地域周縁部をイクター *iqṭā'* (用益権・徴税権つきの牧草地か農地であろう) として与えると約束して、キラーブ族を寝返らせ、市民の企てを失敗させた。(Z 112-4) しかし、マンスールがキラーブ族にイクターを与えなかったため、キラーブ族による農耕地域周縁部への侵攻、オリーヴ樹木伐採は激しくなった。そこで、マンスールは名望家とキラーブ族指導者を城塞(カルア)に欺いて招待し、拘禁した。

2年あまりの拘禁後(405/1014)、カルアから脱走したサーリフが、キラーブ族などアラブ遊牧民を集集すると、マンスールはギルマーン騎兵のほか、市の職人・商人 *sūqa* や下層民 *awbāsh* などからなる民衆 *'awāmm* を集めざるを得なくなった。その民衆も、多くはキリスト教徒やユダヤ教徒であったという。アレppo東郊のヌクラ *Nuqra* 地方で行われた戦いで、二千という民衆が戦死し、マンスールが捕虜となった結果、ムスリム名望家 *mashā'ikh* がサーリフと交渉し、アレppo市内 *bāṭin* と周辺地域 *zāhir* の税収を折半することでスルフ(和約)の締結に至った。(Z 114-8; Mir'āt 71-3; K 9/228-9) 翌年、マンスールはファーティマ朝と結んだ部下のギルマーンや市民によって追放されてアンティオキアに移り、ビザンツに仕えるようになった。こうして、アレppoははじめてファーティマ朝の支配下に入った。(Mir'āt 90-5; Z 118-9, 121)

415/1024年にはサーリフとキラーブ族は再びアレppoを攻撃した。同時代のエジプトの歴史家ムサッビヒー (M 181, 210) によれば、市民の一部がキラーブ族を市内に招き入れたが、他の市民はサーリフが市壁の塔を破壊しはじめたことを、ビザンツへの引き渡しの準備と見て、カルアになお籠城をつづけるファーティマ朝駐留軍に協力してキラーブ族と戦いはじめたという。また、同時代のアンティオキアのキリスト教徒ヤフヤー¹⁴⁾ とその記述にも基づいたイブヌル・アディーム (Z 129-30; B 9/4162) は、サーリフがビザンツのアンティオキア総督から援軍を得ただけでなく、カルア攻撃に参加した市民が十字架を掲げ、鐘を鳴らし、皇帝支持を唱え、アブー・ウサーマ家の判事は最後までカルアに拠って抵抗し、陥落

後に投獄されたとしている。これに強く反発したムスリム市民は、金曜日にコーランを掲げ、スークの中をデモ行進したという。両史料は、サーリフ派市民の多くが親ビザンツ派やキリスト教徒であることで一致しており、ファーティマ朝側について市民がムスリム主体と認めてよいであろう。政権獲得後、サーリフが多くの名望家の私有地 *amlāk* を没収したのはこのことと無関係とは思えない。(Z 144; Q 75)

したがって、官僚のトップ、宰相 *wazīr* や書記長 *kātib* には、キリスト教徒のテオドロス Tādruš, ムアンマル Muammal, トーマス Tūmā らが任命された。(Z 132, 136, 141) キリスト教徒の宰相・高官登用は中断があるが、ミルダース朝末期までつづいた。(Z 161, 181, 203; B 10/4338) 上記の事実は、11 世紀初頭のアレppoでは、キリスト教徒が多数派といえないまでも、大きな少数派であったことを示している。

一方、すでにハムダーン系諸君主は形成途上のシーア派を後援していた¹⁵⁾。ファーティマ朝からアレppoを奪ったミルダース朝さえ、シーア派のファーティマ朝カリフの名で金曜日の説教(フトバ *khuṭba*) を挙行しつづけたし、名目的な総督任命を受け入れた。その間 2 回、ファーティマ朝はアレppoを回復した(429–33/1038–42, 449–52/1057–60)。こうして 12 世紀初頭には、アレppo市民の過半がシーア派とさえいわれるようになった。(A 97) アッバース朝を奉じるセルジューク帝国の勢力が強大化した 462/1070 年、ミルダース朝君主が金曜日の説教で唱えるカリフを、ファーティマ朝からアッバース朝に変更したとき、スンナ派が多い名望家 *mashā'ikh* の説得は容易であったが、民衆 *'amma* の抵抗が強かったという。(Z 173) ただ、10 世紀半ば以降のバグダードでハンバル派主導のスンナ派市民とカルフ Karkh 区の商人・職人を中心としたシーア派との衝突が頻繁に見られるようになった¹⁶⁾ のとは違い、この時期のアレppoのスンナ派・シーア派間の対立は深刻ではなく、ともに親ファーティマ朝であったようである。

これに対し、マンスールはキリスト教徒を主体とした民衆やキラブ族と結んで、ムスリム名望家の勢力を抑え、同時にファーティマ朝による併呑を防ごうとした。しかし、かれはキラブ族への十分な利益分配を拒んだため、キラブ族の指導者サーリフがキリスト教徒を主体とする名望家・民衆の協力を得て支配権を奪い取った。ただ次章で述べるように、サーリフはムスリム民衆の一部にも支持されており、ビザンツに貢納しなかったようである。このように市民はスンナ派、シーア派、ヤコブ派シリア正教会、東方正教会(メルク派)、ユダヤ教などに分かれ、それを横断する統合は困難であった。また、比較的主体的に民衆がマンスールやサーリフを支持したと見られ、名望家層の指導は明確ではない。

十字軍時代に高揚するジハード(内面における悪や弱志の克服というふつうの意味ではなく、異教徒の侵攻に対する防衛的聖戦)概念については、イブン・ヌバータ Ibn Nubāta (374/984–5 年死) がサイフッダウラの対ビザンツ戦をジハードと捉えた上で、アレppo市民に激的な演説や押韻散文で参加をよびかけたものの、一般化しなかったといえる¹⁷⁾。

395/1005年、エデッサ付近のサルージュ Sarūj（現トルコ領）の地主アスファル al-Aṣfar がアレppoのビザンツに対する従属に業を煮やして、地域の民衆やキラブ族、ヌマイル族をジハードに結集してアンティオキアを攻撃しようとしたが、ビザンツの意を汲んだルーラーに捕えられ、カルアの牢獄に監禁された。このときも、アレppo市民の賛同が広がりやを欠いたようである。（Yahyā 258-9; B 2/698-700; Z 111）

第2章 ミルダース朝補助軍としてのアフダースと名望家勢力の停滞

10世紀末のダマスクスでは、アフダースとよばれる武装民衆に権力基盤をおくライースが市民運動を主導したと考えられているが、本章では従来詳細な研究がなかったミルダース朝期のアレppoのアフダース¹⁸⁾について検討しよう。

（一）アレppoのアフダースが史料にはじめて登場するのは、兵や民衆の一部を率いてアレppoをサーリフに開城したギルマーン騎兵の一人、ムスタファードの子サーリム Sālim b. Mustafād が、サーリフによってアレppoのライースに任命され、アフダースの指揮権を与えられたときである。（Z 141; B 9/4162）アフダースは長がいる以上、メンバーが固定的であり、おそらくサーリムが居を構えた市中心部のガラス職人 Zajjājīm 地区の民衆をはじめとした若者であろう。サーリフはかれらを組織化し、信用できないムスリム名望家ではなく、旧ハムダーン朝職業軍人に指揮権を委ねたものと思われる。したがって、アフダースは都市内部の協力者を必要とした外来君主の補助軍や警察として利用されたと考えられる。

しかし、ビザンツ皇帝の攻撃を受けて貢納を再開し、最高位の貴族 *magistros* として叙任されたサーリフの子ナスル Naṣr（420-9/1029-38）に対して、（Z 136, 140）サーリムが抵抗したため、425/1034年、アンティオキア総督の要求を容れたナスルによって処刑された。（Z 141; B 9/4162-3）以後、新しいライースは任命されず、アフダースも継続したかは定かではない。ただ、宰相ムアンマルは市壁外にもいくつものモスクを建て市街を拡大した。（Z 136）これは、ミルダース朝が新たに移住した近郊の農民や遊牧民を、非常時に武装させる自派の民衆として育成しようとした試みかも知れない。

429/1038年、ナスルがダマスクス総督アヌシュテギン Anūshṭakīn al-Dizbarī 指揮下のファーティマ朝軍のために敗死したとき、その兄弟シマル Thimāl は名望家を信用せず、ヌマイル族が支配するハッラーンへと逃走した。このあと、一部の民衆 *‘amma* が宮殿や大商人の所有物を略奪する中、名望家は戦わずしてファーティマ朝軍に市を開いたという。これに応え、ファーティマ朝はサーリフが没収していた名望家の所有地を返還したし、アブー・ジャラーダ家の中から新カーディー（判事）（イブヌル・アディームの祖先）を任命した。（Z 142-5; B 3/1223; Q 74-5）

(二) つぎにアフダースが登場するのは、433/1042 年、ファーティマ朝の内紛の中で、エジプトから派遣された軍がアヌシュテギン支配下のアレppoを攻撃したときである。このとき、民衆の一部が政府の穀物倉庫 *ahrā'* を略奪し、アヌシュテギンの兵が籠もるカルア（城塞）を包囲し、シマールを市中（カルアを除く市内）に迎え入れた。シマールによって民衆の中から再組織化されたようであるアフダースは、翌年にはカルアの兵を降伏させ、比較的高い給与 *arzāq*, *'atā'* を支給された。（Z 146-7）ただ、そのメンバーはかつてのアフダースと必ずしも一致しないであろう。

ライースは任命されなかったようであるが、民衆指導者の名前が数多く史料に登場する。Kindī, Ibn al-Zaghrā, Ibn 'Antar, Ibn al-Nāqid (Z 156), Ibn Ḥayyūn, Ibn al-Maghāzilī, Ṣubḥ, Ibn al-Aqrāsī, al-Shuṭayṭī, al-Labbād (Z 160), Ibn Abi al-Rayḥānī, Ibn Naṭr, Ibn al-Shākīrī, Bahlūl (Z 163) らであり、伝統的な名望家層ではないようである。アフダースの人数は不明であるが、千人には及ばなかったと思われる¹⁹⁾。

シマールはただちにビザンツに貢納を再開し、マギストロス、ついで辺境州副王 *exarchos*²⁰⁾ に叙任され、一度はファーティマ朝との関係を絶った。（Z 148, 151-2）民衆はキラブ部族民や近郊農民 *fallāḥīn* とならんで、アレppo奪回を目指すファーティマ朝軍と戦いつづけた。（Z 149; K 9/549）

反対に、アレppoのムスリム名望家は一般に信用されず、宰相には、地域の税制や実情に詳しくないラフバヤ、ウカイル族支配下のモースルの名望家・官僚があいついで任命された。440/1048 年、ダマスクスからファーティマ朝軍が進軍してきたとき、シマールはアブー・ジャラーダ家のカーディーをはじめ、多くの名望家 *a'yān*, *amāthil* を 1-2 年も拘禁し、一人を処刑した。（Z 149; B 2/896, 3/1225）

(三) ミルダース朝とキラブ部族民は、基本的に部族の紐帯を基盤とした相互依存の関係にあった²¹⁾。シマールは 449/1057 年、キラブ族の利権要求に対処できなくなって、アレppoをファーティマ朝に譲渡し、かわりにバイルートなどの総督職を得た。（Z 154）一方、アフダースはファーティマ朝総督から昇給を拒否されて不満を抱き、452/1060 年、ナスルの子マフムード *Mahmūd* がアレppoを攻めると、市内からこれに応じた。ファーティマ朝に忠誠なアリー家出身のカーディーも邸宅を略奪され、市内から追われたという。（Z 155-7）

アレppoの支配者となったマフムードは翌年、ファーティマ朝の支援を受けた叔父シマールの軍に攻撃された。このミルダース家の分裂の中で、アフダースも分裂した。一部はシマールのために門を開いてその兵を市中に招き入れ、他はマフムードに協力をつづけて、郊外での戦闘で破れた。（Z 159-60）アレppoの支配者として復帰したシマールは、マフムード側についたアフダースの指導層 15 人を処刑し、さらに、ビザンツとの保護関係を断ち、ビ

ザンツと結ぼうとしたアフダースの指導層をも処刑した。(Z 162-3)

シマールに忠誠なアフダースは、かれの死後(454/1062)、その後継者(兄弟)アティーヤ‘Aṭīyaを支持して、マフムードのアレッポ攻撃に耐え、名望家らがマフムードに開城することを防いだ。(Z 166)両者はともに、ジャズィーラ北東部からトルクメン遊牧民を傭兵として招いたが²²⁾、戦いに勝ったアティーヤ側のアフダースは、用済みのトルクメンの一部を殺戮した。(Z 167; Az 357; K 9/233-4) 457/1065年、トルクメンと結んでアレッポを奪回したマフムードは、アレッポでトルクメンと市民との衝突が起これると、(Z 172-3)トルクメン側に立って、アフダースの指導層を投獄した。(Z 189)

最初のライースは名望家ではなく、旧ハムダーン朝の職業騎兵(ギルマーン)の一人が任命されたし、その後はライースが任命されず、アフダースは君主直属の補助軍・警察となったようである。マフムードがアフダースを抑えたのは、ミルダース朝の内紛の中でアフダースの忠誠が疑わしくなったこと、そしてより戦闘能力が高いトルクメン傭兵と競合関係になったことがあろう。

以上のように、ここまでのアフダースが12世紀前半のダマスカスのアフダース(そのライースはしばしば宰相兼任)と同様²³⁾、都市君主の傭兵、補助兵として機能してきたことはまちがいでなく、ムスリム名望家を支持して市民運動の尖兵の役割を担ってきたとはいえない。一般に、ミルダース朝期はアアヤーン・アミール体制がやや後退した時代といえ、むしろ、ファーティマ朝支配が大方のムスリム名望家に支持されていたようである。

第3章 都市君主体制の動揺と門閥都市・平民都市化の試み

都市君主が内外の事情で弱体化すると、アレッポの有力名望家が自ら組織したアフダースを基盤に政権を目指したり、逆に君主がアフダースに過度に依存したりする傾向が生まれた。本章ではこうした門閥都市・平民都市化の試みを検討する。

(一) ミルダース朝の崩壊と門閥都市化の試み

463/1071年、セルジューク帝国スルターン、アルプ・アルスラン Alp Arslan がマフムードに忠誠の誓いを要求してアレッポを包囲したとき、市民が積極的に市壁と塔を防衛したが、これは君主を守るというより、外敵に対する自衛の意味が強かったと思われる。(Z 175) さらに、トルクメンの支持に依存したマフムードの子サービク Sābiq に対し、その兄弟を支持したキラブ族はスルターン、マリク・シャー Malik Shāh に救援を要請した。こうして471/1079年、スルターンの兄弟トゥトゥシュ Tutush 指揮下のセルジューク軍がキラブ族やトルクメン、モースルのアラブ系ウカイル族君主ムスリム Muslim b. Quraysh とともにア

11—12 世紀におけるアレppoの自治都市への発展

レppoを包囲した。(Z 193-9; B 3/1299-1300, 9/4078-80; Az 362)

このとき、ライースと称した名望家アッバース家（スンナ派）のフタイティー Hasan b. Hibatillāh al-Khutayfī が中心になって、新たなアフダースが組織された。新しいアフダースのメンバーはかつてのアフダースを継承した部分もあろうが、基本的にはフタイティーが庇護下のイスラーム教徒民衆を中心に新たに組織し、自ら、そのナキーブ *naqīb*（指導者）となった。フタイティーを中心とした市民は包囲に耐え、セルジューク軍やアラブ遊牧民（キラブ族、ヌマイル族、ウカイル族）を撤退させた。ただ、トルクメンがシリア北部ではげしい略奪をつづけ、飢餓を引き起こしたため、翌年はじめにはフタイティーらは、この包囲中に内通していたモースル王ムスリム（ウカイル朝）を保護者として市内に招き入れた。ムスリムはアフダースに褒賞を与え、市民に食糧を提供した。(Z 196, 201-6; B 1/54, 9/4081-2; A 18; K 10/115)

ムスリムはシリア・イラクの広域支配を目指して、トルクメンやキラブ族、ダマスクスを拠点にしたトゥトゥシュとはげしく争いあい、その財源としてアレppo市民からの徴税強化、名望家層からの財産没収をも強行した。(Z 206, 214) 同様な処置を実施したと思われるハッラーンでは、476/1083 年、市民がカーディーのイブン・ジャラバ Ibn Jalaba を指導者として、ムスリムに対して蜂起した。(Z 210-1; Az 364; K 10/127)

ところが、小アジアのトルクメンを結集したセルジューク朝一族のイブン・クトゥルミシュ Sulaymān b. Qutulmish が、477/1085 年、ビザンツからアンティオキアを奪取し、ムスリムを敗死させたあと、一気にアレppoを包囲した。このとき、カルアにはムスリム配下のウカイル族騎兵が駐留していたが、市中はフタイティーが支配するところとなり、攻撃に耐えた。ただ、フタイティーは反対派の民衆を恐れて、市壁の南門キンナスリーン門のすぐ外側にシャリーフ砦 Qal'at al-Sharīf を建設し、城壁と濠で防備を固めた。(Z 216-7, 221; B 1/55, 9/4157; Az 365; A 18) かれはイブン・クトゥルミシュを敗死させたトゥトゥシュに対しても開城を拒んだが、市壁の砦の一つを守っていた大商人がアフダースの一部の支持を得て、トゥトゥシュを市内に招き入れた。トゥトゥシュはフタイティーを市から追放する一方、アフダースを厚遇した。(Z 219-21; Az 366; K 10/147-8; B 9/4157)

フタイティーがアフダースの一部にさえ裏切られて門閥都市の樹立に失敗したのは、シーア派・キリスト教徒を多く含む市民を結集できなかったこと、そして、市民が門閥支配に不慣れで抵抗感をもち、何よりも、必ずしも敵とはいえないセルジューク帝国の抗しがたい進出を目の当たりに見たことがある。

(二) リドワーン体制と平民都市化の挫折

479/1086 年、スルターン、マリク・シャーが自らシリア北部に進み、エデッサ、アレppo、アンティオキアを支配下に置き、それぞれに総督を任命した。アレppo総督アク・スン

クル Aq Sunqur²⁴⁾ (Z 221-2; B 4/1954, 1956, 1958; Az 366-7) が、追剥 *luṣūṣ*, *quṭṭā' al-tarīq* であったというムジャン al-Mujann Barakāt al-Fū'ī をライスに任命したのは、アフダースを名望家の支配から切り離すためであったと思われる。(Z 233, 242) 総督の下で、ミルダース朝以来の宰相であった名望家出身 (B 9/4102) のイブスン・ナッハース Abū Naṣr b. al-Nahhās がムジャンの働きかけで処刑されたように、(Z 226, 242) ムジャンがアフダースに拠って独自の権力基盤を構築していった。一方で、後継宰相には、サイフッダウラのダイラム人 (イラン北部エルブルズ山脈山岳民) 兵を先祖にもつ名望家バディー Badī' 家 (Z 243) の者が任命され、(Z 227) この時代が平和と繁栄の時代と称揚されるように、アアヤーン・アミール体制が円滑に運営されたようである²⁵⁾。

これが君主権強化に転じたのは、487/1094 年、総督アク・スングルがトゥトゥシュの手で敗死し、戦闘にも参加していたアレppoのアフダースが、市をトゥトゥシュに引き渡したときである。(Z 226, 229; B 4/1957; Q 126) 翌年、トゥトゥシュの死後、その子リドワーン Ridwān がアレppoに拠って全シリアの支配を継承しようとしたが、弟ドゥカク Duqāq が多くのセルジューク系軍人の支持を受けてダマスクスで自立した。リドワーンはシリア全土の支配を目指し、セルジューク系、アラブ系のシリア諸支配者と歩調を合わせなかった。たとえば 490/1097 年、一時、金曜日のフトバ (説教) で唱えるカリフをアッバース朝からファーティマ朝に切り替え、十二イマーム派の名望家アブー・ウサーマ家から説教師を任命した。(B 6/3012-3; Z 235-6) 翌年、弟ドゥカクが諸支配者が十字軍に包囲されたアンティオキア救援に駆けつけようとしたのに対し、かれ一人干渉しなかった。

そのため、かれは、名望家マウスール Mawṣūl 家 (B 2/805, 997) から宰相を任命したものの、(Z 236-7, 241-2; Az 372) 他の名望家や自らのアタベグ *atabeg* (実母の夫となった有力軍人) の信望を失い、アフダースへの依存を強めた。ムジャンとアフダースはリドワーンの政敵の軍人を暗殺したり、(Z 233; K 10/255) 補助軍として働いたりした。(Z 234) リドワーン体制とは、アフダースや、のちにはファーティマ朝と袂を分かったニザール Nizār 派 (いわゆる暗殺者教団 Assassins) を使って名望家を抑えこみ、君主権強化を目指すとともに、シリア全土の正統な支配者として他の支配者と対決するものであったといえよう。

詳細は不明であるが、この中でムジャンの勢力が増大し、ついにかれが市中を事実上支配するようになり、カルアにリドワーンを閉じ込める事態に及んだ。結局、リドワーンはバディー家のサーイド Ṣā'id をライスとアフダース長 *mutaqaddim* に任命して、アフダースや名望家・民衆の多数派をムジャンから離反させ、491/1098 年、ムジャンを捕え処刑することができた。(Z 242-3; B 8/3663; K 10/255; Az 372) ムジャンの試みが成功しておれば、民衆の政治的影響力がかなり増大していたであろうと思われる (平民都市)。

以後、リドワーンはアフダースへの依存を避け、ニザール派を無給の傭兵として利用し、市内でかれらの本部 *dār al-da'wa* の設置と自由な活動を許した。(Z 246, 250; B 8/3661; A 18)

著しく反セルジューク朝・反アッバース朝的なニザール派との同盟は各地で大きな不信を招いたが、シーア派が多いアレppoでは、ただちには市民との亀裂を生まなかった²⁶⁾。

(三) 十字軍の侵攻とムスリム市民の結集

名望家と民衆の多数派の結集が、市民の自然な代表である名望家出身のカーディー（判事）のもとで可能になる契機は、十字軍の侵攻の激化であった。

アンティオキア侯ボエモンド Boemondo I 世は 493/1100 年、アレppo地方西南部の穀倉地域ジャズル Jazr を奪取し、3 年後には、リドワーンに屈辱的な貢納²⁷⁾と教会の鐘のカルア城壁設置を認めさせた。(Z 245-6; A 40-1) さらに 502/1109 年、アンマール ‘Ammār 家のカーディーが支配する門閥都市トリポリが南フランス・トゥールーズ伯爵レーモン Raymond の手に落ち、ついで翌年、アレppo西方の農業都市アサーリブ Athārib がアンティオキア侯タンクレーディ Tancredi に奪われことは大きな衝撃を与えた。

アレppoは食糧や貿易路の確保さえ不安定になり、恐怖を抱いた一部の市民がジャズイーラやイラクに避難したという²⁸⁾。一部はバグダードに赴き、直接カリフに窮状を訴えようとした。リドワーンは財政難をしのぐため、名望家に 60 もの国有地（廃村 *khirba*）を売却するとともに、(Z 252-3) 新たな諸税を課した。(Z 259, 276; B 8/3661) 505/1111 年、モースル総督マウドゥード Mawdūd 率いる反十字軍のセルジューク軍がアレppoに接近したとき、リドワーンは市民が市を遠征軍に引き渡すことを警戒し、市壁の守備は自らの軍とニザール派だけに委ね、名望家から人質を取った。(Z 254; Q 175)

リドワーンの死後 (507/1113) も、貢納金の受領にもかかわらず、(Z 252, 256, 260; Az 380-1) アンティオキア侯ルッジェーロ Ruggero は隊商や村々の略奪を続け、そのため、リドワーンの実事上の後継者である宦官ルーラー Lu’lu’ al-Bābā は、近隣の諸支配者に救援を要請しなければならなかった。509/1115 年、ハマダーン Hamadān（ギリシア語 Ecbatana）総督ブルスク Bursuq b. Bursuq 指揮下のセルジューク軍がスルターン、ムハンマド・タパル Muḥammad Tapar によってシリアに派遣されたとき、ルーラーだけでなく、ダマスクスの支配者（ドゥカクの前アタベグ）、トゥグテギン Tuḡtakīn や、ジャズイーラ東部のマールディーン Mārdīn やニシビスを支配していたトルクメン指導者、アルトゥク Artuq 家のイル・ガーズイー Īl Ghāzī も、遠征軍が十字軍に対し決定的な勝利を取めないように、ルッジェーロと連携して遠征を失敗に終わらせた。(Z 263-5; Q 192-3; K 10/509-11)

イブヌル・アディーム (Z 262) のことばを借りれば、「奇妙なことに、アレppoで各地の諸王の名が（主君として）金曜日の説教で唱えられたが、誰一人、アレppoでの統治を望まず、フランク人（西欧人）を撃退できる者もいなかった。というのは、指導者たちは今の自分の地位を確保するため、フランク人の存在を（心底では）望んでいたからである。」

名望家 *a’yān* と民衆 *‘awāmm*、スンナ派とシーア派がリドワーンに対して結集するように

なり、505年にはアフダースとともに蜂起し、ニザール派を殺害または追放した。(Z 255-6; B 8/3662-3) 市内に残ったニザール派も、2年後にリドワーンが死ぬと、カーディー、アブル・ファドル・イブヌル・ハッシャーブ Abu'l-Faḍl b. al-Khashshāb に扇動されたサーイド指揮下のアフダースによって投獄、殺害された。(Z 260; Az 382; K 10/499; A 18-9) なお残った少数のニザール派は517/1124年、アルトゥク家のバラク Balak b. Bahrām によって追放された。(Z 287)

したがって、リドワーンの子アルプ・アルスランはアフダースに頼るしかなくなり、名望家バディー一家出身のライース、サーイドを、財産没収の上、ウカイル族が支配するユーフラテス河畔の砦カルアト・ジャァバル Qal'at Ja'bar に追放し、民衆出身のフラティー Ibrāhīm al-Furātī をライースに任命した。しかし、かれがダマスクスの支配者トゥグテギンを招いてその保護を受けようとしたため、508/1114年、ルールーや軍人によってカルア内の宮殿で暗殺され、6歳の弟が擁立された。(Z 260-2; B 4/1984-6; Q 191; Az 382-3)

こうして、十字軍の侵攻という危機的状況の中で、イブヌル・ハッシャーブの指導下で、スンナ派とシーア派の名望家・民衆が結集した門閥都市化への道が開かれた。アフダースでさえ、名望家サーイドの指揮下で、門閥都市を支える通説的な性格をもつようになった。

第4章 カーディー主導の門閥都市体制

(一) アルトゥク家軍事指導者と門閥都市体制

ルールーがアレppo最初のハーンカーフ *khānqāh* (神秘主義者道場) を設けたのは、(Z 259; A 93) 自らの正統性の認知を市民に求めたためであろう²⁹⁾。しかし市中では、ルールーの支配は当初からニザール派を除去した名望家に大きく制約され、門閥都市への移行が始まったと思われる³⁰⁾。510/1117年には、名望家との闘争に破れたルールーがカルアト・ジャァバルに逃れようとし、途中、ムハンマド・タパルによってアレppo総督に任命された元モースル総督アク・スンクル・アル・ブルスキー Aq Sunqur al-Bursuqī を支持するセルジューク系軍人によって殺された。(Z 265-6; B 4/1985; K 10/531; Az 383) このあと、名望家は比較的強力な常備軍と官僚を擁するブルスキーによるアレppo開城要請をあくまで拒否し、(Z 266-7; Az 384) ようやく手中に収めた門閥都市体制を守ろうとした。

ふつう、トルクメンの指導者イル・ガーズイーのアレppo入城をもって、アルトゥク家のアレppo支配が始まったとされる。しかし、実際はカーディー、イブヌル・ハッシャーブを中心とした名望家がアレppoの真の支配者であったことを、本節では示したい。

ルールーの死後まもなく、ルッジェーロがアレppo北方の農業都市アザーズ 'Azāz を奪取した (Z 266-9; Az 385) のに対し、名望家 *a'yān, muqaddamīn* は十字軍からの防衛者としてイル・ガーズイーを、かれの兵への給付を市民に負担させる約束でマールディーンから招聘

した。(Z 269) かれはアレppoでは、リドワーンの娘や宦官が籠るカルアにも、名望家が支配する市中にも入れず、市壁外側のシャリーフ砦に拠らざるを得なかったし、(Z 267)「状況が悪化すると、子テムルタシュ Temürtash を置いてアレppoを去った」(Az 384)という。したがって、市民から見れば、トルクメン遊牧民は、滞在中の給付だけを負担するパートタイムの安あがりの傭兵にすぎず、戦利品をおもな収入源としていた³¹⁾。反面、イル・ガズイーの不在時には、市民はアンティオキア侯やエデッサ伯の侵攻に対して、トゥグテギンなど近隣の諸支配者に来援を要請せざるを得なかった。(Z 267-8)

513/1119 年、イブヌル・ハッシャープの要請を受け、トルクメンを率いてアレppo救援に再び駆けつけたイル・ガズイーは、カルアに入って、王族や宦官、セルジューク系軍人を追放し、その財産を奪うことができたが、市中を支配することはできなかった。(Z 269) かれや後継者のバラクはせいぜいリドワーンの娘と結婚して、支配の正統性を主張するだけであった。(Z 280, 287; Az 393) この年、かれはアンティオキアとの中間点にあるアフリーン ‘Afrīn 溪谷でルッジェーロを敗死させる大勝利をあげたものの、領土の回復も、アレppo支配もできないまま、(Z 269-74; Q 200-1; Az 386-7; K 10/554-5) 遠方のグルジア遠征にかかわって、一度、短期間アレppoに戻っただけで3年後に死亡した。

以上の事実から、ルーラーの死後、アルプ・アルスランの幼弟はなお生存していたが、アレppoは名望家が支配する門閥都市になったと考えるべきであろう。市政の中心となったのは、アシュトルが指摘したように³²⁾、「市中の治安維持と公共の利益 *maṣālih* の監視について責任をもった」(Z 269) とされるシーア派名望家出身のカーディー、アブル・ファドル・イブヌル・ハッシャープである³³⁾。イブヌル・マウスールが宰相として留任したが³⁴⁾、(Z 280) リドワーンが商業取引に賦課した諸税は廃止された。(Z 276)

スンナ派とシーア派との協調を示すものは、516/1122 年にザッジャージーン地区に設けられたアレppo初のマドラサである。これはスンナ派市民を懐柔するため、アリー家の指導者ズフラ Zuhra b. ‘Alī al-Husaynī がシーア派民衆の反対を抑えて設置したもので、名望家の一人、シャーフイー派法学者イブヌル・アジャミー ‘Abdurrahmān b. al-‘Ajāmī が教授として任命された。(Z 283, 301; B 4/1959-60; Az 390; A 96-7)

さらに翌年、エデッサ伯ジョスラン Joscelin I 世がアレppoを攻め、郊外の聖墓をはじめとした墓地を破壊すると、イブヌル・ハッシャープとその子アブル・ハサン Abu’l-Hasan の指導で、主教会へレネ教会を含め市内の4つのキリスト教会がミフラブを設けたモスクに改造された。これらはのちハナフィー派のマドラサとして転用された。(Z 286; B 1/62, 412; Az 393; A 41, 45, 110, 114, 116) こうして、少数化がすでに進んでいた内部のキリスト教徒をスケープ・ゴートにすることで、ムスリムの団結が強まった。

この門閥都市体制の中で、ライースのフラーティー、ついで514/1120年にライースに任命されたハマー Hamā 出身のマッキー Makkī b. Qurnāṣ 指揮下のアフダースが主導すること

はなく、むしろかれはアルトゥク家指導者のアレppoでの君主権確立に協力した。(Z 278; Az 387) アフリーン渓谷の戦いでは、イブヌル・ハッシャーブが雄弁にトルクメンやムスリム戦士の勇気を奮い起こさせたが、(Z 271)³⁵⁾ アフダースはこの戦いの勝利後はじめてアレppoから出て、アンティオキア領の城市を略奪しただけである。(Z 273) マッキーはイル・ガーズイーがカルアに移ったあと、その命令でシャリーフ砦からセルジューク系兵士を追放し、砦を破壊した。マッキーが、イル・ガーズイーの不在時にカルアに残された子による反乱に協力して、助手 *a'wān* や駐留軍指揮官とともに処刑されたあと、ユーフラテス河畔の最寄りの渡河点バーリス Bālis 出身のアジュラーニー Sulaymān b. 'Abdirraẓāq al-'Ajlānī がライースに任命された。(Z 278-80; Az 388)

イル・ガーズイーの死から9ヵ月後の517/1123年、そのおいバラクがアレppoを包囲し、村々や畑に火を放ち、家畜を奪ったため、市民の一部が市門を開いた³⁶⁾。バラクは市民の抵抗を未然に防ぐため、もっとも重要な西門アンティオキア門と北の市壁の一部を破壊した。(Z 284-5; Az 391; Q 209; K 10/611)

このように、バラクは君主権確立を目指したようであるが、かれもまた遠方のユーフラテス最上流域の山岳にあるハルトペルト Khartpert に拠点を持ち、トルクメン遊牧民の軍事力に頼り、実効的なアレppo支配を可能にするだけのインフラストラクチュアをもたなかった。たとえば、占領から数ヵ月後、バラクがハルトペルトに戻っている間に、ジョスラン1世がアレppoを包囲し、周辺の村々や畑を焼き、オリーブなどの樹木を切り倒し、市民が戦わざるを得なくなった。(Z 286) バラクがアレppoに戻ってきたときは、カルアにギルマン駐留兵を置き³⁷⁾、イブヌル・ハッシャーブとバディー家のサーイドの子ファダーイル Fadā'il を逮捕し³⁸⁾、ハッラーン出身のイブン・サアダーナ Muḥammad b. Sa'dāna をライースとして任命した。(Z 288; Az 393)

このときは、まもなくバラクがアレppo北東の都市マンビジ Manbij (Hierapolis) の攻撃で戦死し(518/1124)、かれに協力してきたいとこ、テムルタシュもアレppo防衛を放棄し、ファダーイルをライースに任命して、(Z 290; Az 394) 本拠マールディーンに帰ってしまった。こうして、イブヌル・ハッシャーブに防衛と財政の責務が集中した。(Z 293)

以上から、アルトゥク家支配の実態はほとんどなく、アレppoが門閥都市であったことが認められるであろう。市民が騎兵になり得る騎士文化をもたないため、ギルマン騎兵かトルクメンを必要としたことが、門閥都市体制の破壊をもたらしたといえる。

(二) モースル総督による広域支配の確立

イェルサレム王(アンティオキア侯摂政)ボードゥアン Baudouin 2世、エデッサ伯ジョスラン1世と、アッバース朝と争ってイラクから逃走してきたマズヤド朝の王ドゥバイス Dubays b. Ṣadaqa、さらにリドワーンの子らが連合してアレppoを包囲した。この危機に、

カルア駐留兵は十字軍と戦うのではなく、給与の支給を要求し、名望家 *akābir* の財産を没収しはじめた。(Z 295) テムルタシュにも救援を拒絶されたアレppoの名望家は、ついにスルターン、マフムードによってモースル総督として再任されたアク・スングル・アル・ブルスキーに救援を要請せざるを得なくなり、アブー・ジャラーダ家のアブー・ガーニム Abū Ghānim (イブヌル・アディームの曾祖父) やアリー家のズフラらを派遣した。(B 4/1964-7; Z 293-4; K 10/623)

こうして 518 年末 /1125 年初頭、ブルスキーは市民歓呼の中をアレppoに入り、包囲軍を撤退に追い込んだ。ただ、かれは十字軍を壊滅してしまえば、市民が自分を必要としなくなることを恐れ、イブヌル・ハッシャーブの要請を無視して、十字軍への追撃を避けたとされる。(Z 295; B 4/1966; K 10/624) かれはまたモースルの宰相ら官僚をアレppoに移し、(Z 299; K 10/634) 不在時でも比較的実効的なアレppo支配を可能にした。イブヌル・ハッシャーブはまもなく自宅付近で夜間に暗殺されたという。(A 35; Az 395-6)

アレppo市民がつぎに門閥都市体制を回復しようとしたのは、521/1127 年、ブルスキーがモースルで暗殺されたあと、かれのトルコ人兵フトルグ・アベ Khutlugh Abeh が、スルターンの任命がないまま、カルアに拠って支配権を継承しようとし、イブヌル・アジャミーら名望家の財産を没収したのに対し、ライースのファダーイルに指導された市民がカルアを包囲したときである。(B 7/3216-9, 8/3845-6, 3851; Z 299-302; Az 398-400) まもなく、マリク・シャー時代の総督アク・スングルの子で、ブルスキーの部下でもあったザンギー Zankī が、スルターン、マフムードによってモースルとアレppoの総督に任命され、アレppoに入った。ファダーイルがアレppoから追放され、かつてイル・ガーズイーに忠実に仕えたアジュラーニーの兄弟がライースとして任命され、市民からの徴税をも担当した。(Z 302; Az 400; K 10/650-1; A 35) こうして、ライースが君主の官僚と化した。

ブルスキーのアザーズ攻撃では市場の職人・商人などの民衆 *‘amma* が多く戦死したが、(Z 296; Az 395) 529/1135 年には、ザンギーはアサーリブ、マアッラトゥン・ヌウマーン Ma‘arrat al-Nu‘mān などをアンティオキア侯国から奪回し、食糧供給と隊商路を確保した。(Z 312; B 8/3845) 反面、市民や近郊農民の歩兵としての戦闘参加は、強制力を伴った徴用に変化したとされ、ザンギーの圧制 *zulm, jawr* の一つに数えられている。(B 8/3852) カルアの城壁を強化したのもブルスキーとザンギーである。(A 24)

ザンギーは 539/1145 年には、徴税強化に抵抗するイブヌル・ハッシャーブの子アブル・ハサンら名望家をモースルに軟禁した。(A 36, 97) モースルで生まれた子アブル・ファドルはシーア派市民を指導して大きな勢力を維持したため、570/1174 年、ザンギーの孫イスマーイール *Ismā‘īl* に殺され、その私有荘園 *qarya*、フータ al-Hūta は没収された。(Shāma 2/216-8; A 124) こうしてアレppo門閥都市はその芽を摘まれた。

むすび

従来、アレppoが一時的にせよ、市民の自治都市と化したことは十分には認識されてこなかった。アシュトル、カエン、ハフェマンがカーディー、イブヌル・ハッシャーブ主導の市民運動にも簡単に触れたが、一般には名望家出身の「市長」ライースと、ライースを支えた「民衆兵」アフダースがダマスクスとアレppoの市民運動の中核と考えられてきた。

10世紀末のアレppoでは、ビザンツに服属する都市君主と化したハムダーン朝やそのギルマン騎兵指導者が、発言権を増した都市名望家の承認と賛同を求めるようになった（ホジスンがいうアァヤーン・アミール体制）が、11世紀前半まではキリスト教徒、シーア派、スンナ派が拮抗しており、市民多数派の形成は困難であった。ようやく11世紀初頭、ギルマン騎兵とムスリム名望家の大きな部分が結集して、キリスト教徒にも支えられた親ビザンツの都市君主を追放し、一時ファーティマ朝を迎えた。

まもなくアラブ遊牧民キラブ族の指導者ミルダース家が、ビザンツと結び、市民の一部（とくにキリスト教徒）の支持で支配権を奪取した。ムスリム名望家・民衆の多数派は、二代目ナスル以後、ビザンツ保護国体制を継承した都市君主ミルダース朝の支配を必ずしも受け入れず、二度にわたりファーティマ朝を迎え入れた。ミルダース朝もムスリム名望家を信用せず、初代サーリフが組織したアフダースのライースはギルマンから選ばれたし、三代目シマールが再組織したアフダースにはライースが任命されなかった。アフダースは君主の補助軍・警察にすぎず、末期のマフムードはこれをほぼ解体し、トルクメン傭兵に切り替えることもできた。この時期のアフダースやライースは市民運動の先頭に立つ存在ではなく、アァヤーン・アミール体制はやや後退したといえよう。

ライースやアフダースがはじめて市民運動の先頭に立ったのは、ミルダース朝末期の混乱の中で、名望家アッバース家（スンナ派）のフタイティーが民衆からアフダースを組織して自らライースと称したときである。したがって、かれとアフダースは都市君主から任命・組織されたわけではなく、同じ名称であっても、従来のものとは性格が異なっている。フタイティーはシーア派・キリスト教徒を含めた名望家や民衆の多数派の結集に失敗し、アレppoはモースルのアラブ支配者ムスリム、ついでセルジューク帝国の支配下に入った。かれが門閥都市樹立に失敗したのは、圧倒的な軍事力をもつ（しかし妥協は可能である）セルジューク帝国の進出という、抗しがたい客観的状況が背景にあったからであろう。

セルジューク帝国の総督は名望家から切り離れたアフダースを自らの補助軍・警察として温存し、下層民出身のムジャンをライースに任命した。そのムジャンがアフダースに頼り切ったセルジューク系都市君主リドワーンに反抗し、市中を支配下におこうとした。ムジャンの失敗後、ライースは、名望家のバディー家を例外として、アレppo民衆もしくは他都市出

身者が任命されるようになり、都市君主に忠実な官僚と化した。同様にアフダースはおおむね君主の補助兵・警察としての役割にとどまった。

アレppoの門閥都市化は、シーア派のカーディー、イブヌル・ハッシャーブを中心に、リドワーン末期から進み、その後継者ルールーに対抗する形で成立した。従来、アレppoでは名望家出身のカーディーが政治的に大きな役割を果たしたわけではない。しかし、イブヌル・ハッシャーブはアンティオキア侯やエデッサ伯を中心とする十字軍（征服されれば殺される妥協の余地が少ない敵だが、圧倒的な軍事力はない）の侵攻と食糧生産地・隊商路奪取という危機的状況の中で、その雄弁によってジハード概念の復活・普及に大きく寄与し、少数派化していた市内のキリスト教徒をスケープ・ゴート化することで、スンナ派とシーア派の名望家・民衆を結集することに成功し、自己の指導権を確立した。

しかし、職業騎兵が戦闘でもっとも重要な役割を果たすこの時代に、騎士文化をもたないアレppo市民が十字軍に対して外部の騎兵に頼らなければならない点に、門閥都市が長期化しなかった直接の原因があるといえよう。市民は遠方に拠点をもち、官僚制をもたないトルクメン遊牧民の指導者イル・ガズイーらに、必要なときの軍事的支援を期待した。しかし、パートタイムの傭兵としての性格や遠方居住は、常にはタイムリーな支援を得ることを困難にしたし、アルトゥク家といえども、機会あれば、自らの君主化を試み、市民と対立することもあった。こうして、結局は、名望家自らが、あれほど警戒していた官僚と常備軍を擁するセルジューク帝国モースル総督に救援を要請しなくなってきた。当然のごとく、モースル総督は傭兵やジハード戦士としてではなく、アレppoを自己の広域支配権の中に組み込み、セルジューク帝国内部での自己の権力拡大に利用しようとした。

以後のアレppoは、あいついでザンギー朝、アイユーブ朝、マムルーク朝、オスマン帝国の広域支配体制に組み込まれ、経済的繁栄を欲しいままにして拡大の一途を辿ったが（世界遺産の世界最大級の旧市街を保存）、門閥都市体制が復活する気配は絶えてなかった。

本稿では史料の制約から、門閥都市体制内部の構造に触れることはできなかった。ただ、フタイティーやサーイドの失敗とイブヌル・ハッシャーブの成功とを対置して考えると、前者が富にのみ優れ、アフダースという庇護下のムスリム民衆をおもな支持基盤としていたのに対し、後者が学識に優れたカーディーとしてムスリム市民全体の自然な指導者であるという違いが目立つ。ともに支配の法的根拠をもたない点では共通するものの（ウェーバーがいう非正当的支配）、前者が市民を結集できるだけの精神的根拠をもたないのに比べ、イブヌル・ハッシャーブは裁判を通じてだけでなく、ジハード概念の復活を通じても精神的に市民のみならず、外部の軍人をも指導し、個々の案件については、説教師を通じて、毎週、大モスクでの礼拝時における市民集会で市民を説得し、支持を集めることができた。他の名望家とは個人の邸宅や大モスクの礼拝室・回廊で絶えず協議があったはずである。税務はひきつづき市中にある宰相私邸で行なわれたと思われる。政治に民衆出身のライースやアフダース

がどうかかわったのか、民衆の要望がどういう形で提出されたのかは不明であり、おそらくは民主的な形態や実質はなく、名望家の寡頭政が優越していたと思われる。それも、十年程度の門閥都市体制が広く市内外の人々に承認される合法的、永続的形態をもって確立したとは言いがたい。ただ、短期にせよ、アレppo自治都市が成立したことは認めてよいのではないか。

注

- 1) 拙稿「10世紀後半のダマスカスの市民自治運動と民衆」『人文自然科学論集』（東京経済大学紀要）120（2005），pp. 27-52, 「11世紀初頭のコルドバの市民運動と民衆」同122（2006），pp. 19-56, 「11世紀後半のトレード市民の反「王」運動」同123（2007），pp. 17-45, 「11世紀における門閥都市バレンシア」同125（2008），pp. 3-40.
- 2) アラブ征服時には、フォルムは隣接する主教会、ヘレネ教会（のちのハラーウィーン・マドラサ）の庭園と墓地になっていた。（A 30-1, 123）
- 3) 太い直線的な道路が基盤の目状になっているローマ都市が、いつイスラーム都市に変化したかについては意見が分かれている。最近の諸説の概観については、A. Walmsley, *Early Islamic Syria: An Archaeological Assessment*, London, 2007, esp. pp. 31-47.
- 4) マックス・ウェーバー『都市の類型学』, 世良晃志郎訳, 創文社, 1964, 英訳 *The City*, tr. Don Martindale & G. Neuwirth, London, 1960. ウェーバーも、中東都市が西欧都市に近く、兄弟誓約への呪術的障害が比較的小さいと認めている。英訳 p. 119（この部分の世良訳はあいまい。p. 140）
- 5) M. G. Hodgson, *The Venture of Islam*, vol. 2, University of Chicago, 1974, pp. 91-135. ただ、ホジソンは都市と農村の違い、都市における大商人の役割を過大視している。
- 6) E. Ashtor-Strauss, "L'administration urbaine en Syrie médiévale", *Rivista degli Studi Orientali* 31 (1956), pp. 73-128, esp. p. 117; Claude Cahen, "Movements populaires et autonomisme urbain dans l'Asie musulmane du moyen age", *Arabica* 5 (1958), pp. 225-250（アレppoとダマスカス）, 6 (1959), pp. 25-56, 233-65, *Encyclopaedia of Islam*, second edition, 12 vols., Leiden, 1960-2004（以下 *E.I.* と略記）, vol. 1, p. 236, "ahdāth", *La Syrie du Nord à l'époque des croisades et la principauté franque d'Antioche*, Damascus, 1940, pp. 269, 277, 298. のちアシュトル（E. Ashtor, "Républiques urbaines dans le Proche-Orient à l'époque des croisades?", *Cahiers de Civilisation Médiévale 10e-12e siècles* 18 (1975), pp. 117-31）は、商業や産業を振興したファーティマ朝が大商人層の支持を受け、したがって、10世紀末のシリア諸都市の対ファーティマ朝反乱は都市下層民の反乱であり、11世紀後半の反乱はセルジューク帝国に対してファーティマ朝を支持する大商人層の反乱であるとした。しかし、名望家層は国際的大商人というよりは地主であり、商業的利益を重視した証拠はない。
- 7) Axel Havemann, *Ri'āsa und Qadā': Institutionen als Ausdruck wechselnder Kräfteverhältnisse in Syrischen Städten vom 10 bis zum 12 Jahrhundert*, Berlin, 1975, esp. pp. 113-142（ライースとアフダース）, *E.I.*, vol. 8, pp. 402-3, "ra'īs".
- 8) これらの史書についての概観は *La Syrie du Nord*, pp. 40-3; B. Lewis & P. M. Holt, *Historians of the Middle East*, Oxford, 1962, p. 111.

11—12 世紀におけるアレppoの自治都市への発展

- 9) エッデは、サイフッダウラの治世について『渴望』が引用している膨大な文献を詳細に検討した。Anne-Marie Eddé, “Les sources d’Ibn al-‘Adīm sur le règne de Sayf al-Dawla en Syrie du Nord”, ed. C. F. Robinson, *Texts, Documents and Artefacts*, Leiden, 2003, pp. 121–56.
- 10) *E.I.*, vol. 5, pp. 1210–1, “al-Maghribī” .
- 11) M.Canard, *Histoire de la Dynastie des H’amdānides de Jazīra et de Syrie*, vol. 1, Paris, 1953, pp. 598–618, 741–827, *E.I.*, vol. 3, pp. 126–31, “Ḥamdānids”; H. Kennedy, *The Prophet and the Age of the Caliphates*, Harlow, 1986, pp. 275–82; *E.I.*, vol. 9, pp. 103–10, “Sayf al-Dawla” (Th. Bianquis).
- 12) シリア北部のアッバース家については H. Kennedy, *The Early Abbasid Caliphate*, London, 1981, pp. 74–5.
- 13) 厳密には、ルルーはサイフッダウラのギルマーンの一人 Ḥajrāj の *mawlā* (特定の有力者の保護を受ける者または解放奴隷) というが、(Z 112) 少なくとも間接的にはサイフッダウラのギルマーンとみてよいであろう。なおカナルは (11) の論文で、Ḥajrāj をパレスティナで有力なアラブ遊牧民のタイイ族指導者 Jarrāh 家と混同している。
- 14) *Patrologia* 版にはないこの部分のヤフヤーの逐語的な紹介は Bianquis, *Damas et la Syrie sous la domination fatimide*, 2vols., Damascus, 1986, vol. 2, pp. 451–8.
- 15) サイフッダウラはアレppo西郊外のジャウシャン山 Jabal Jawshan にフサインの子ムハッシン Muḥassin の廟 Mashhad al-Dikka を建て、アリーの子孫らシーア派をハッラーンなどからアレppoに移住させた。(B 1/60, 411–2; A 48–9) さらに、子アブル・マアラーは 367/978 年、アレppoのモスクで、礼拝を知らせる呼びかけ *adhān* の中にシーア派的なことば「最も良き行いに来たれ。ムハンマドとアリーは最も良き人間である。」を導入し、376/986 年にはファァティマ朝カリフの名で金曜日の説教を挙行した。(Z 100, 102) *E.I.*, vol. 9, p. 109; *H’amdānides*, pp. 656–7. マンスールもまたファァティマ朝のアル・ハーキムをカリフと認めた。(Mir’āt 70; Z 112, 114) スンナ派を振興したセルジューク帝国のアレppo総督アク・スングルさえ、Mashhad al-Dikka を再建している。(B 4/1955)
- 16) Simha Sabari, *Mouvements populaires à Bagdad à l’époque ‘abbasside*, Paris, 1981, pp. 103–12, 119–20.
- 17) *E.I.*, vol. 3, p. 900, “Ibn Nubāta” (Canard); C. Hillenbrand, *The Crusades: Islamic Perspectives*, Edinburgh, 1999, pp. 101–2.
- 18) ミルダース朝軍の一部としてのアフダースについては、大田敬子「ミルダース朝の軍隊編成」『イスラム世界』25/26 (1986), pp. 26–48.
- 19) 大田, p. 35.
- 20) 『精髓』刊本の不分明なアラビア語表記は *exarchos* と読むべきであろう。
- 21) 大田 (p. 33) が推測するように、キラーブ族に対する給与支給は「便宜的に改変され、制度として整備されたものでは無かった」し、「戦闘利益(戦利品獲得)を補うものにすぎなかった」。したがって、「実質的利益が伴わない場合、キラーブ族軍団は積極的に参集しないし、敗戦時にはすぐに離散してしまう」。これに対して、キラーブ族騎兵を、遊牧的要素から脱却したアルメニア馬使用の職業騎士とし、ギルマーンと同様に見なすビアンキの説 (*E.I.*, vol. 7, pp. 115, 118) は、史料上の根拠に欠け、受け入れがたい。キラーブ族がマンスールから約束されたイクターとは、氏族ごとにも与えられた牧草地・農地のことと思われ、個々の騎兵にも与えられた徴税権を伴う農地を意味するものではないであろう。ビアンキ自身、別な論文 (*Damas et la*

- Syrie, vol. 1, p. 313, vol. 2, p. 459) でそう推測しているように見える。
- 22) 大田, pp. 37-40. トルクメン傭兵は472/1080年に千騎?とされる。(Z 193)
 - 23) A. Havemann, "The vizier and the ra'īs in Saljuq Syria: The struggle for urban self-representation", *International Journal of Middle East Studies* 21 (1989), pp. 233-42; J-M. Mouton, *Damas et sa principauté sous les Saljoukides et les Bourides, 468-549 / 1076-1154*, Cairo, 1994, pp. 203-7, 231-7.
 - 24) アク・スングルは幼少時からマリク・シャーといっしょに育てられた同僚 *aṣḥāb, atrāb* の一人であり, 成長後, スルターンの親しい仲間 *awliyā'* の一人になったという。(Shāma 1/139) 一般にセルジューク帝国の常備軍は奴隷兵とされるが, 根拠は確かでない。
 - 25) 名望家アブル・ハサン・イブヌル・ハッシャープの主導で, 大モスクの現存する高さ45メートルのミナレットが建設された。(Z 222; B 4/1955; Az 367; A 33-6)
 - 26) M. G. S. Hodgson, *The Secret Order of Assassins*, University of Pennsylvania, 2005, pp. 89, 93; Farhad Daftary, *The Ismā'īlīs: Their History and Doctrines*, Cambridge, 1990, pp. 349, 358-9. 親イスマエール派傾向が強い両著は, リドワーンがニザール派信徒になった可能性を強調する。しかし, 当時, ファーティマ朝カリフ後継問題における政治的対立を除いて, ニザール派とエジプト派(ムスタラー派)との違いがあったとは思えず, 信仰においてニザール派というのはナンセンスではないか。政治的便宜にすぎないと思えるべきであろう。R. W. Crawford, "Ridwān the Maligned", *The World of Islam: Studies in Honor of Philip K. Hitti*, ed. J. Kritzeck & R. B. Winder, London, 1960, pp. 138-9.
 - 27) より正確には, 貢納というより, 略奪をしないかわりの代金 *truce bribe* というべきものであろう。Crawford, p. 143, note 1.
 - 28) イブヌル・フラートに引用されたイブン・アビー・タイイの歴史に拠る。Hillenbrand, p. 75.
 - 29) ハーンカーフとマドラサがもつ社会的統合とセルジューク体制正統化の役割については Omid Safi, *The Politics of Knowledge in Premodern Islam*, Chapel Hill, 2006.
 - 30) カエン (*La Syrie du Nord*, pp. 269, 283-4) も同様に考えているようであるが, アルトゥク家を君主と見て, 名望家の共和政がそれでもって終了したと見なしている。
 - 31) H. A. R. Gibb, "Zengi and the fall of Edessa", *A History of the Crusades*, ed., K. M. Setton, vol. 1, Madison, 1969, p. 451. イル・ガーズイーはマールデーンの税収に基づいて, 若干の職業騎兵をもっていたであろう。
 - 32) Ashtor-Strauss, p. 97.
 - 33) アブル・ファドルはイブヌル・アディームの曾祖父と農地の境界をめぐる紛争を起こし, リドワーンの調停を受けた。(B 8/3662) かれの一族がシーア派であることは, アイユーブ朝期の al-Ḥasan b. Ibrāhīm がシーア派であることから確認できる。(B 5/2246-7) 後者はスンナ派からも預言者ムハンマドの伝承を伝え, 教友への非難を避けているし, イブヌル・アディーム自身が親友として『渴望』に伝記を掲載しているように, スンナ派と良好な関係にあった。またイブヌル・フラートによれば, ハンバル派が多いアブー・ジャラーダ家さえ, シーア派を含んでいたという。*La Syrie du Nord*, p. 268, note 16.
 - 34) 516/1122年にかれが死ぬと, ラフバのタグリブ族出身の名望家 Sa'dullāh b. al-Sarātān が宰相に任命された。(Z 262, 280, 283; B 9/4238; Az 391)
 - 35) ヒレンブランド (*The Crusades*, pp. 108-11) は, イブヌル・ハッシャープを, 『ジハードの書』 *Kitāb al-Jihād* (刊本 *Arba'a Kutub fi'l-Jihād*, ed. Suhayl Zakkār, Damascus, 2007, pp. 41-165) を著

11—12 世紀におけるアレppoの自治都市への発展

したダマスカスの名望家スラミー al-Sulamī (500/1107 年没) とともに、十字軍に対するジハードを説いた初期のイデオログと考えている。こののち、十字軍時代のシリアでは、ビザンツ帝国と戦った初期ムスリムを賛美する、多分に創作や脚色を伴ったシリア征服史がジハードへの参加を奨励する目的で書かれ、アッバース朝初期の歴史家ワーキディー al-Wāqidī の作に帰せられた。B. Paret, “The legendary futūḥ literature”, *The Expansion of the Early Islamic State*, ed. F. D. Donner, Aldershot, 2008, pp. 163-75.

- 36) バラクに開城した名望家は、イブヌル・アディーム (Z 285) によれば, Muqallad b. Saqawīq と Mufarraj b. al-Faql であり, イブヌル・フラート (*La Syrie du Nord*, p. 296, note 35) によれば, Ibn al-Khallāl という。後者によれば, イブヌル・ハッシャープが同意していたとされる。
- 37) 駐留兵の数は, 519/1125 年の十字軍による包囲時に 500 騎? という。(Z293)
- 38) *La Syrie du Nord*, p. 298; *E.I.*, vol. 1, p. 983. アシュトル (p. 98) とハフェマン (p. 101) もカエンに従っているが, カエンは史料を明らかにしていない。